

第 24 回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

功労賞受賞者

- <氏 名> 河野 一郎（こうの いちろう）
- <所 属 等> 筑波大学名誉教授 等
- <学 歴> 1973 年 東京医科歯科大学医学部卒業
- <学 位> 医学博士（筑波大学）
- <職 歴> 1999 年～2010 年 筑波大学体育系教授
2010 年～現在 筑波大学特命教授
2006 年～2010 年 2016 東京オリンピック・パラリンピック
競技大会招致委員会 事務総長
2011 年～2015 年 日本スポーツ振興センター 理事長
2013 年～現在 東京オリンピック・パラリンピック競技大会
組織委員会 副会長
2016 年～2020 年 ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会
事務総長代行
2019 年～現在 日本スポーツフェアネス推進機構 代表理事

＜功 績＞

河野一郎氏は専門であるスポーツ医・科学の分野で、長きにわたり研究活動に携わり、運動と免疫という新しい分野の研究に力を注いだ。また、それだけでなく、アスリートに対するサポート体制の整備にも尽力し、その成果はスポーツ医・科学にとどまらず日本のスポーツ界に多大な影響を及ぼした。

同氏は「運動と免疫」という分野の研究に注力した。ヒトが細菌やウイルス等の生物学的ストレスに対抗するための、重要な役割を果たしている機能が免疫機能であり、同機能が崩れていくと、健康の維持・増進に多大な影響を及ぼすことになる。当時（平成 10 年頃）、健康の維持・増進には、スポーツが有用であるということが広く受け入れられ始め、多くの疾病予防にも活用されていたが、同氏はその土台といえる免疫機能の重要性に注目し、運動と免疫に関する研究を進めた。「平成 6 年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. IV スポーツ活動が免疫に与える影響に関する研究（第 1 報）」にて、研究班の班長として研究活動をリードし、他の班員とともに研究成果をまとめ、論文として発表した。この時点では、スポーツ活動が免疫に与える影響に関する研究は、スタート地点に立ったという段階であった。

翌年、同報告書第 2 報では、「スポーツ活動が免疫機能あるいは広義にヒトの防衛体力に与える影響」を取り上げ、運動が感染症等の疾病への抵抗を高める要因とその影響について研究を続け、防衛体力を高めることが、健康の維持・増進に欠かせないものであるということを発表した。

平成 8 年、日本体育協会（現 日本スポーツ協会）において、「ジュニア期におけるスポーツ活動と防衛体力に関する研究」が、同氏を班長としてスタートした。スポーツ界では体力を行動体力と防衛体力に分けて考えるが、これまでは行動体力に関する研究が多くを占めていた。防衛体力とスポーツ活動のかかわりについて関心が高まりつつあったが、詳細については不明な点が多かったため、研究班では、茨城県の小学生を対象とした風邪症状に焦点をあてたフィールドワークを行った。日本では当時、このようなフィールドワークは少なく、独自性のある研究となった。さらに、この研究班では、同氏をはじめとする班員が様々な研究を行い、多くの先進的な成果を発表した。これはスポーツ活動と防衛体力、免疫機能に関する研究の先駆けであった。

また、同氏は日本体育協会において数多くの研究班班長およびメンバー、委員会委員として力を注いだ。スポーツ医・科学委員会の委員を長年務め、上述の通り「ジュニア期におけるスポーツ活動と防衛体力に関する研究」「スポーツ活動が免疫に与える影響に関する研究」では班長を務め、研究をリードした。また「指導者育成委員会アスレティックトレーナー部会」の部会長として、アスレティックトレーナー制度の創設に尽力した。昭和 50 年代、日本国内でアスリートのコンディショニングにかかわる「トレーナー」の役割への関心が高まりつつあった。しかし、国内でトレーナーとして活動する者のバックグラウンドは鍼灸師、柔道整復師、理学療法士、アメリカなど国外の資格保有者など様々であり、そのことが原因でスポーツ現場に混乱を招くことがあった。そこで、トレーナーの意義と役割を明確にするための「アスレティックトレーナー制度」を創設し、平成 8 年度から養成講習会を開始、令和 3 年 10 月 1 日現在、4,729 名の公認アスレティックトレーナーが登録されている。同氏の尽力に

よって発展したアスレティックトレーナー制度によって養成された者は、オリンピック・パラリンピック競技大会をはじめとする国際大会、国民体育大会等のメディカル・コンディショニングスタッフとして活躍し、プレーヤーやアスリートのパフォーマンスを支えている。

同氏はこれらの活動のほかにアンチ・ドーピング活動に力を入れてきた。平成 10 年頃、日本のアンチ・ドーピング活動は満足いくものでないと考えていた同氏は、日本のドーピング検査数は他国に比べると極端に少なく、また、アンチ・ドーピングにかかわる国内組織が整備されていなかったことに問題意識を持っていた。過去のオリンピック競技大会では、違反薬物の使用によりレース中に選手が死亡するという事故も発生していたことから、早急な国内の体制整備が必要であることを訴え、平成 13 年に日本アンチ・ドーピング機構の設立を主導し、自ら理事長に就任した。また、世界アンチ・ドーピング機構の創設期には基準・国際調和委員会の委員として関わった。現在の日本のアンチ・ドーピング活動は世界でも重要な役割を果たしており、同活動における世界からの信用度は極めて高いといえる。このように現在の日本国内のアンチ・ドーピングシステムを構築した同氏の功績は多大である。また、同氏は平成 30 年、国内のドーピング検査活動の独自性を確保するために、一般社団法人日本スポーツフェアネス推進機構を設立した。同年 4 月に世界アンチ・ドーピング機構が新たな国際基準を制定し、各国のアンチ・ドーピング体制は、より客観性と独立性が求められることとなった。これを受け、日本国内のアンチ・ドーピング体制の基本方針を審議するためのアンチ・ドーピング体制審議委員会の運営母体として上記機構を設立し、同氏は代表理事を務めている。

さらに、日本オリンピック委員会においては、情報・医学・科学を基盤としたわが国の選手強化システムの構築、国際競技力向上戦略の策定、国立スポーツ科学センターおよびナショナルトレーニングセンターの設置を推進し、また、新スポーツ振興法制定プロジェクトアドバイザリーボード座長としてスポーツ基本法策定に関わった。

また、日本スポーツ振興センター理事長として我が国のスポーツ政策の再構築、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副会長として、東京 2020 大会の開催とオリンピック・ムーブメントの推進、国際ラグビー連盟理事としてラグビーワールドカップ 2019 日本大会の開催を推進、日本ラグビーフットボール協会理事等として、競技団体の情報・医・科学システムの構築を行うなど、各種団体・組織において幅広く活躍し、また後進の育成を行い、わが国スポーツの普及・発展に多大なる貢献をしている。

第 24 回秩父宮記念スポーツ医・科学賞 奨励賞受賞者

＜グループ名＞ 日本卓球協会スポーツ医・科学委員会競技サポートチーム
＜代 表＞ 吉田 和人 氏

2021 年開催の東京 2020 オリンピック競技大会の卓球競技にて、日本代表が史上初の金メダルを獲得した。今大会では混合ダブルスの金メダル、女子団体の銀メダル、男子団体と女子シングルの銅メダルを合わせて、4 個のメダルを獲得した。この成果は日本卓球協会の様々な取り組みが寄与した結果であるが、その中で、スポーツ医・科学委員会競技サポートチームの長年にわたる活動は大きな役割を果たした。

卓球競技は 1988 年のソウルオリンピック競技大会から正式競技となった。当時の諸外国の競技レベルは正式競技決定の 1981 年から年々高くなっていたため、正式競技として開始してから 20 年以上オリンピックでメダルを獲得することはできなかった。しかし、若手選手の育成や様々な研究に基づく医・科学サポートにより、日本の競技レベルは上がり、着実にメダルに近づいていた。そして、2012 年のロンドン大会で日本は悲願のメダルを獲得した。女子団体での銀メダルであった。続く 2016 年のリオデジャネイロ大会では、日本卓球史上初、シングルスで銅メダルを獲得した。男子シングルスであった。この大会では男女団体でもメダルを獲得し、中国に次ぐ 3 個のメダルを獲得した。そして、東京 2020 大会では混合ダブルスで悲願の金メダルを獲得し、日本の競技レベルの高さを改めて世界に証明した。

スポーツ医・科学委員会は同協会の強化部に属する専門委員会の一つである。この委員会は、スポーツ科学、医学、栄養学などをはじめとする専門家で構成され、スポーツ医・科学の分野から、ナショナルチームの選手強化、卓球の普及・発展に貢献するための関連諸活動を行うことを目的としている。この委員会の特徴は、歴代の委員長らを中心とした活動により得られた成果を受け継ぎ、着実に積み重ねているところにある。近年のナショナルチームの強化選手をはじめとした競技サポートには主に、情報、栄養、医学、メンタル、コンディショニングの 5 つの部門が大きく関わってきた。

各部門の功績は次の通りである。情報部門は、年間を通じた国際大会場面を対象にしたゲーム分析、ジュニアトップ選手やナショナルチームの選手を対象にした身体動作の測定などにより課題の抽出と改善に取り組んだ。また、2006 年頃から試合映像データベースの構築を行い、ナショナルチームの選手や指導者がインターネットを介していつでも必要な試合を見ることができるサポートを継続している。このデータベースの登録試合数は、2021 年 7 月時点で 21,000 試合超であった。栄養部門は、国際大会期間中のコンディショニング維持を目的とした栄養サポート・栄養情報の発信、ジュニア選手や指導者を対象とした継続的な栄養教育により国際大会期間中でも選手自身が理想的な栄養補給を行えるよう取り組んだ。医学部門は、整形外科、内科、外科、脳神経外科、皮膚科、麻酔科などの医師で構成され、選手が良好な健康状態を維

持し、十分なパフォーマンスを発揮できるよう各専門分野からサポートした。アンチ・ドーピング対応を含め、海外遠征先でベストパフォーマンスを発揮できるように健康指導のアドバイスも行っている。メンタル部門は、研修会の定期的開催や、選手たちの自発性を大事にした個別サポートを実施してきた。選手たちが自分なりに心理サポートを活用することにより、練習の質の向上や大事な国際大会での実力発揮度の向上に役立てている。最後にコンディショニング部門は、ストレンクス&コンディショニングとアスレティックトレーニングに参与してきた。ストレンクス&コンディショニングでは、体力や競技力向上を目的として、主に男子選手を対象に計画的かつ継続的にトレーニングを行った。アスレティックトレーニングでは、傷害を予防しながら競技力向上を目的としたコンディショニングに取り組んだ。また、不運にも外傷や傷害が起こった際には迅速な評価を行い、医師、コーチ、トレーナーなどと連携しながら早期回復を目指したりリハビリテーションをサポートした。このように、5つの部門で選手を包括的にサポートした結果が、近年の国際競技力向上に貢献したと言える。

本グループの代表者は、日本卓球協会スポーツ医・科学委員会の委員長であり、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科教授の吉田和人氏である。吉田氏は1987年に同委員会（旧名称：スポーツ科学委員会）の委員に就任し、2012年から2017年まで副委員長を務めた。その後、2017年からは委員長として、委員会活動の推進を担っている。また、2013年から、国際卓球連盟スポーツ医・科学委員会の委員を務めている。専門はコーチング科学であり、スポーツバイオメカニクスやスポーツパフォーマンスアナリシスの手法などを応用して、卓球に関する論文を数多く発表している。

日本卓球協会スポーツ医・科学委員会は2020年1月から2021年3月まで「卓球：医・科学コラム」を同協会のホームページ上で掲載した。ここでは、スポーツ科学・医学・栄養学・教育学などを専門とする同委員会の委員がそれぞれの専門分野に沿ったテーマで記事を掲載した。例えば、成長期の傷害予防や、睡眠時間と食事と体調といった有益な情報を広く一般に公開した。これらの活動は、スポーツ医・科学の成果が選手育成の現場において活用される土台作りに貢献している。